

『恵みを心に刻む』

マルコ4章1節-9節

「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び・・・」(8)

- 1、今日は、新約聖書の中でも良く知られたイエスの譬え話「種を蒔く人」から、学びます。
「種を蒔く人」はフランスの絵画ミレーの代表的作品にもなっています。農民の父を思い浮かべて1850年に描いたものですが、背後には聖書のこの場面があります。岩波書店は店のマークに、彫刻家・詩人高村光太郎のレリーフを基にした「種を蒔く人」を用いています。また、小牧近江はプロレタリア文学の同人誌に『種蒔く人』(1921)と名を付けました。「種を蒔く人」は日本の文化に溶け込んでいます。
- 2、イエスはまず、人々の生活の経験を大切に温めつつ教えます。種蒔きは農民の生活そのものです。種が蒔かれて実を結ぶまでには、いろいろな出来事があります。道端で鳥に食われた種(単数形)、石地に落ちて根が伸びずに枯れた種(単)、茨の中に落ちて実を結ばなかった種(単)、そして良い地で多くの収穫となった種(複数形)は、一つの物語です。日常生活の苦労や喜びの全体を含むのが物語です。そこには生活そのものの肯定があります。神の福音は、ありのままの「種蒔く生活」が神の恵みとして覚えられています。物語の全体が「恵みの出来事」として語られています。「種が実を結ぶ」そのことは、「生」「生きること」「命」の肯定です。しかし、そこには事柄の順序があります。「苦しいこと」「悲しいこと」「辛いこと」があって「そして」「また」収穫という喜びがあります。「収穫感謝」は実を結ぶまでの全体の恵みへの感謝なのです。NHK「朝ドラ」の「マッサン」も「ウイスキー造りの成功」との結論は誰にも察しがついていても、ハラハラする出来事が次々に起こり、「そして」その次の日もドラマは続きます。「そして」全体がドラマです。
- 3、この譬えの物語りの原文には、「そして、and (原語はkai)」という接続詞が21回用いられています。「朝起きて、そして顔を洗って、そして御飯を食べて、そして学校へ行きました。」という小学生の作文のように、「そして」が用いられています。新共同訳では、「そこで」「しかし」「また」「すると」「そして」と5回しか訳していません。田川建三訳では「そして」を15回訳しています。そこには、日常生活の時の流れが描かれています。鳥に食われた種も枯れた種も結実しなかった種も、実を結んだ種も並列で、物語に組み込まれています。いわば、我々人生の出来事の波風、嵐、平穏を含めて「そして」で繋がれています。「苦難」があるが、「だがしかし」ではなくて、「そして」恵みがあるという言い方に注目したいと思います。「恵み」は併記された負の事柄を含めての全体を言うのです。もちろん「実を結ぶ種」(8)に強調点が置かれていることは確かです。しかし、物事を繋いだ全体が「恵み」の出来事であります。だから毎日「そして」「そして」とたどるような出来事の連鎖をこそ、恵みとして心に刻みつつ歩みたいと思います。